

第1節 都市周辺部の聖母像崇敬

1 チーゴリの聖母

崇敬の起源

まずは都市周辺部^{コソクタード}から考察を始めよう。サツケッティが最初に言及しているチーゴリの聖母(図1-3a)への崇敬は一四世紀初頭に遡ると考えられるが、この聖像が安置されているサン・ミニアート司教区の城塞は、それよりはるか以前から宗教性を帯びた土地であった。⁽⁸⁾ フィレンツェとピサ、シエナとピストイアをそれぞれつなぐ道のほぼ中間に位置するサン・ミニアート丘陵に向かい合うようにして、およそ二キロほど離れたアルノの平原に、チーゴリの城塞(Castrum de Ceulis)は聳えている。現在でもサン・ミニアートからは二時間に一本ほどの間隔で数本のバスが運行しているだけで、車がなければ徒歩でしかたどり着くことのできないこの小さな村落の頂に、大天使聖ミカエルに捧げられた聖堂(図1-2)が聳えていたことが史料から確認されるのは一二世紀以降である。チーゴリが一六二二年まで属していた都市ルツカの司教古文書館に保存される一二六〇年の文書記録には、この聖堂が一一九四年以降には近隣のファツブリカ司教区に属していたことが伝えられているのである。⁽⁹⁾ 高く聳える孤立した場所を、天の軍勢の長にして勇敢なサタンの征服者たるこの聖人の庇護下におくことは、西欧中世に広く普及し



図 1-2 サン・ジョヴァンニ・バッティスタ教区聖堂 (旧サン・ミケーレ聖堂)
チーゴリ

た伝統に従うものと考えられる。もともと、チーゴリの城塞の頂に建つこの聖堂でいかなる崇敬が聖ミカエルに捧げられていたのかは明らかではない。この教会は教区教会でも小教区教会でもなく、おそらく崇敬は、聖ミカエルに結びつけられることの多い呪術的で守護的な性格を帯びた民衆的信心と深く結びついたものであったと推測されている。そして聖母崇敬がこの聖ミカエルへの古い崇敬の上に公式に接木されたのは、一三三六年以降となる。フィレンツェのオンニサンティ聖堂にルッフィーノ修道士が創始したロンバルディア起源の修道会ウミリアーティの修道士たちが、この年チーゴリに定住をはじめ、サン・ミケーレ聖堂のあった場所に新たに聖母に捧げた修道院と聖堂を築き、サンタ・マリア・エ・サン・ミケーレ聖堂と名づけたのである。¹⁰ 現在ではこの聖堂はサン・ジョヴァンニ・バッティスタ教区聖堂と呼ばれているが、この名は、ウミリアーティ修道会自体の廃止にともない、一五七九年に近隣ファツブリカに古くから存在したサンティ・ジョヴァンニ・エ・サトゥルニーノ聖堂の名称を継承したものである。

では、古くから存在した聖ミカエル崇敬に聖母崇敬が加えられた経緯とはいかなるものだったのだろうか。また、そもそも崇敬を集めた聖母像 (図 1-3 a) とは、いつ頃から本聖堂に存在したのだろうか。史料からは、遅くとも一三三五年以前には像の存在が確認されている。しかしこの年代よりも早くから、聖母への特別の崇敬がチーゴリに根づいていたことを示す文書が残存している。サン・ミニアートの執政官書記ジョヴァンニ・デイ・レンモ・ダ・コムニョーリの年代記によれば、一三一六年、この地はピサ (皇帝派) とフィレンツェ共和国 (教皇派) との抗争の的となり、同年五月一日、チーゴリの城塞はピサの領主ウグッチョー



図 1-3b 同右 1980 年の盗難 (1986 年に再発見) と修復以前冠は 1924 年に兵士たちによって戴冠された際のもの



図 1-3a 作者不詳《聖母子(チーゴリの聖母)》14 世紀初頭 着彩木彫 テンペラ チーゴリ サン・ジョヴァンニ・パッティスタ教区聖堂 (旧サン・ミケーレ聖堂) 通称「幼児たちの聖母の至聖所」179 × 97 cm

ネ・デツラ・フアッジョーラによって征服され、住民たちはサン・ミニアートへと避難を強いられた⁽¹¹⁾。一年足らずのうち、チーゴリとサン・ミニアートの村民は城塞を奪回しようとし、一三二七年七月二日に包囲を開始した。しかし、軍事行動に出る前に、高さからも堅牢さからも難攻不落に見えた北側の要塞の一部が晩禱の時刻に突如として崩壊し、包囲軍はこの奇跡的に開かれた突破口から進入して、流血をみることなくピサ軍を捕虜にしたという。この説明しがたい奇跡を、人々は聖母の執り成しによるものと考えた⁽¹²⁾。そして、聖母への感謝とその名誉を称えるために、すべての囚人が、いっさい暴力を受けることなく解放されたと伝えられている。もっともその後、

この小さな集落チーゴリは一三三三年にサン・ミニアートに征服され、一三七〇年にはサン・ミニアートとともに自由都市としてフィレンツェの支配下に入ることになる。

この一三一七年の奇跡にあやかって聖母像が制作された可能性は、後で見るように、様式的には想定しうるものである。しかし、はたしてこの出来事が既存の聖母像による加護であったのか、あるいは奇跡を受けて聖像が奉納用に制作されたのかは、明らかではない。いずれにせよその後、聖像への崇敬はこの奇跡を端緒として一躍昂揚し、一四世紀以降、崇敬は聖母の在俗信心会によって管理され、礼拝対象とされた聖像は、当初はバットゥーティとともに城塞全体の信仰と福祉を担っていたこの信心会に属

するサン・ミケーレ聖堂附属祈禱堂に保管されていたが、その後、サン・ミケーレ聖堂身廊の側壁祭壇に安置されて、現在に至っている。

聖母像の造形的特徴

では、当の聖母とはいかなる像なのだろうか。

その造形的特徴を考察するにあたって、考慮しておかねばならない経緯がある。現在、本聖堂の司祭を務めるジャンピエトロ・タッデイ神父によれば、本像が示す現在の外観は、それ自体、ある奇跡的な逸話に包まれている⁽¹³⁾。一九七九年一月三十一日早朝、聖堂の鐘塔に落ちた雷による火災から、像は傷ましい損害を受けた。ただちに、ピサ文化財保護局の介入によりジャーニ・トラーパーニに修復が委ねられた。翌一九八〇年七月、毎年恒例の祝祭のために修復途中の像は一時的にチーゴリの聖堂に返還されたが、そのさなか、七月一七―一八日の夜に今度は盗難に会い、失われてしまう。ところが、この打ち続いた災難から六年を経た一九八六年一月六日、聖母の無原罪の御宿りの祝日前々日の夕、何者かによって聖堂に隣接する司祭館のベルが鳴らされ、司祭が扉を開けると、そこに包みが置かれていたという。なかには、まぎれもないチーゴリの聖母像が入っており、しかも修復途中であったはずの像は完全に修復されていた。この経緯自体、まさに奇跡というべきものであるが、後世の介入により青地に金の星をちらし、全体を暗褐色に塗られていた像(図1-3b)は、この窃盗者による修復によって、その下層に残っていたかつての色彩を顕わにすることとなった。司祭タッデイ神父の話では、聖母の外套などにはまだ後世の上塗りが残されたままであるが、盗難を恐れてこれ以上の修復を控えているという。なお、一九二四年に土地の兵士たちによって戴冠されて以後、聖母子の頭部を飾ってきた冠も、この盗難の折に失われてしまった。このように、現在の外観の大部分が、おそらくは商業的利益を求めて窃盗者たちが行った修復に負っていることを踏まえたうえで、本作の造形性の分析に移ろう。

たマントの色に由来する名称で、十字架崇敬を中心に据えた在俗信徒の悔悛運動をさし、ジェノヴァ付近を発祥地とする。信者たちは行列を組んで十字架を運び、特別の賛歌をうたい、とくに共同体の参加、個人間の結束、社会階層間の緊張や政治的対立の克服、反目し合う党派の和解を主張した。ルッカではこの運動は早くから普及しており、サン・ロモロ聖堂に存在した奇跡を起こす木彫十字架像への崇敬を核として活動を展開していた⁽²⁶⁾。このビアンキの運動の昂揚に乗じて、おそらくウミリアーティ修道会は、チーゴリの聖母崇敬の流行を復活させようと試みたものと考えられる。

というのも、おそらくこの奇跡は自発的なものというよりは、修道士たちによって意図的に演出された可能性の高いことがすでに明らかにされている。注目されるのは、少女に現れたこの聖母の幻視において、像と聖なる存在との従来の関係が転倒しているという点である⁽²⁷⁾。通常ならば、第五章第1節で考察するように、既知の聖像の記憶をベースに聖なる存在の顕現を体験したり、幻視が契機となって聖母の特徴を再現した像を後から制作するものだが、ここでは既存の像が、それを見

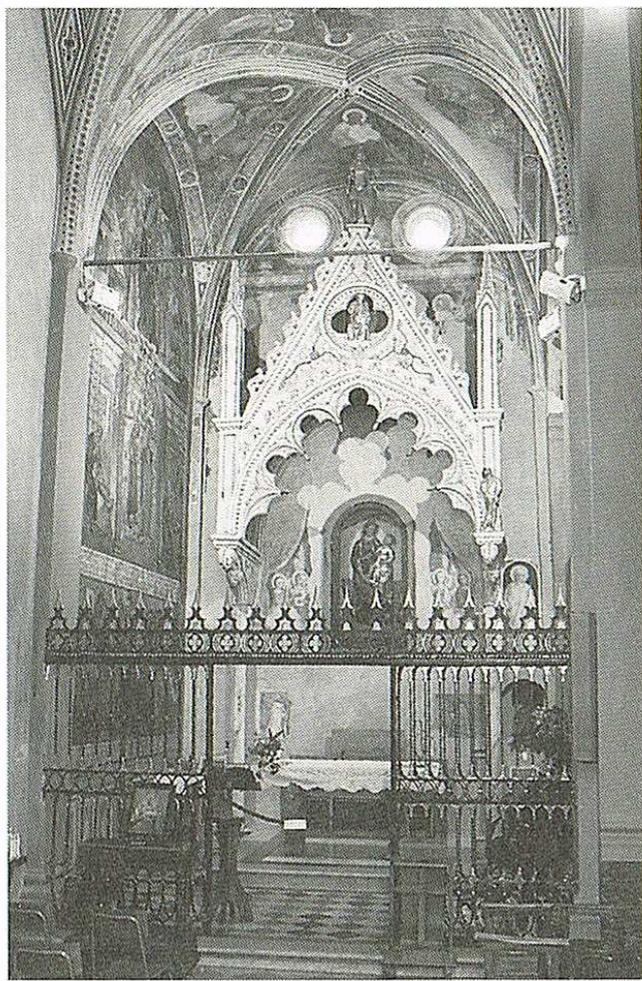


図 1-13 ゴシック様式の聖龕：ネーリ・ディ・フィオラヴァンテ作 1381年
 フレスコ画：ステファノ・ダントニオ・ディ・ヴァンニ 15世紀後半
 側壁のフレスコ画：ディルヴォ・ロッティ《幼児たちの聖母の奇跡》1937年
 チーゴリ サン・ジョヴァンニ・バッティスタ教区聖堂（旧サン・ミケーレ聖堂）通称「幼児たちの聖母の至聖所」

たことのない少女に顕現し、その幻視が当の像の安置されている場への巡礼を誘い、事後的に幻視と像との同一性が確認されるという展開を示している。こうした関係は、後で述べる奇跡にも見るように、チーゴリの聖像崇敬においてつねに確認される特徴である。いずれにせよこの現象の中核には、あくまでも既存の聖

ニサンティ修道院のウミリアーティ修道士たちによってこの聖母崇敬が導入されプロモートされていた。その普及を示すものに、一三九二年にサン・ミニアートの執政官を務めていたフランコ・サツケツティが、その『三百話 (Trecentonovelle)』第二三〇話で語っている本像にまつわる逸話を挙げる事ができる。そこで彼は、バーテという名のフィレンツェの老高利貸しに対する悪戯を伝えている。いわく、街壁外での夕食からの帰途、仲間たちがバーテをからかって追いはぎの襲撃を演出する。バーテは袋のなかに身を潜め、夜を過ごした。このとき彼は、日頃から信心を捧げていたチーゴリの聖母に、無事に難を逃れたあかつきには「追いはぎに囲まれて袋に入った」自らの「蠟でできた」奇妙な像を聖堂に捧げるといふ誓願を立てたといふ。⁽²³⁾

このように、チーゴリという一地方の聖母像は、一四世紀を通じてシエナ、ピサ、フィレンツェにまでその名を高めていった。その流れのなかで、一三八一年には、ウミリアーティ修道会士が聖像を保管するために、フィレンツェのオルサンミケーレ聖堂の名高い奇跡像を擁するべくアンドレア・オルカーニャが制作したタベルナクルム(聖龕)(一三五〇年代、図1-53)を範とするゴシック様式の壮大な漆喰聖龕(現存、図1-13)をネーリ・デイ・フィオラヴァンテに制作させ、像を荘厳化するに至っている。⁽²⁴⁾しかしながらその甲斐も空しく、冒頭に引用したサツケツティの一節に記されていたように、インプルネータの聖母やフィレンツェの受胎告知の聖母への新たな崇敬の波を受けて、チーゴリへの巡礼は一四世紀末には早くも翳りを見せつつあったようである。もともと、この崇敬は直ちに息絶えたわけではない。その後の経緯もまた、聖像の力を左右する興味深い事例を示しているため、一考しておきたい。

まず聖母崇敬の再燃を導いたのは、チーゴリの聖母が少女に顕現するという新たな奇跡である。⁽²⁵⁾一三九九年および一四〇〇年に、一〇歳のヴァルデルサの少女ともう一人のピサの娘にチーゴリの聖母が奇跡的に姿を現した。「ビアンキ(白党)に属していないものはこの党に加わり、灯を手にチーゴリに巡礼に赴くように、そうすれば罪は取り除かれるだろう」と告げ、この地域一帯にビアンキの運動を流行させたのだ。ビアンキとは、身につけてい